

名誉会員 村田健郎博士を偲ぶ

中澤 喜三郎

本会名誉会員

2009年7月27日村田さんが逝去されました。1923年生まれ、85歳でした。私どもは関係者も含め常日頃から気安く単に村田さんと呼ばせていただいていたので、ここでも村田さんと呼ばせていただきます。村田さんは柔道4段、身体の鍛え方は尋常ではないはずと思っていたので、御逝去の報は誠に残念です。

村田さんが創成期のコンピュータ分野の仕事にかかわるようになったのは、工学部数学力学教室の雨宮先生のTACプロジェクトに携わることに始まります。TACは、当時英米で開発された電子計算機の開発を目指し文部省の機関研究費により東大と東芝が共同開発（雨宮先生が事務方を担当）したプロジェクトで、基本素子に真空管、主記憶装置にRAMであるブラウン管記憶装置を用い、命令セットは英国EDSACを下敷きに、さら

に割算命令、浮動小数点演算をも予定したシステムでした。村田さんは大学側の一人として2～3年東芝研究所に派遣されていましたが、筆者がTACにかかわるのは1949年秋に通称東芝TACが東大に設置され、調整が始まる直前、雨宮・村田さんの下で大学院に進学が決まったときが最初でした。しかし、村田さんがこのときにも予想していたごとく、TACはなかなか稼働するに至らず、東芝の関係者も1～2年で引き揚げて、TACが動かないのは、真空管の寿命故障が問題だからだという俗論も流されていました。村田さんはTACをこのまま放り出すわけにはいかないと院生の筆者と二人で細々と本当の問題は何かを

探っていた最中、1957年10月4日の朝日新聞のコラム欄で“超スローモーの電子計算機”という形で指弾されて、学内の幹部を含め大騒ぎとなりました。村田さんは多大の国家予算を使い、技術的に何が悪いのかの経緯も明らかにできないで済ますわけにはいかない、問題点も探られつつあるので、初期TACは全面的に設計し直し作り直して、稼働するようにしようという強い意志を表明し、筆者がCPU系を担当し、ブラウン管メモリは村田さんが実験からやり直し、作り直しを推進されたのです。このように通称「東大TAC」の設計し直し、作り直しは村田さんの強力な推進力で1958年夏スタート、各所の応援もあり翌年春には、稼働させることができたのでした。TACはその後、1962年7月まで東大工学部系等の計算に使用されました。

TAC稼働1年後、村田さんと筆者は共に日立製作所に移り、

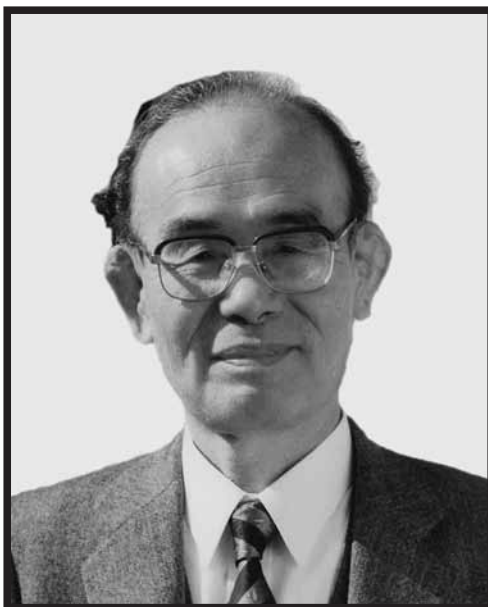
後にHITAC 5020、5020E/Fと呼ばれる国産大型コンピュータの開発に邁進することになります。これは高速トランジスタを基本素子とし、18MHzの高速clockにより基本的に直列の構造の低コストで、外国大型機に匹敵する性能を狙ったもので、多数のレジスタを受動素子である電磁遅延線で実現し、命令セットアーキテクチャは32ビットを基本とする村田さんの考えに沿うものでした。当時日立もRCA社と提携をしましたが、村田さんはこれにも強く反対で、国産の5020系の開発は中央研究所で実施され、入出力系は別とし、CPU系のハードはもちろん、OSや、コンパイラ等のシステムプログラムも自力開発を推進しました。この努力は、全国共同利用の東大大型計算機センターや、気象庁の数値予報用のシステムとして国産大型機の時代を開かせる先駆けにな

ったのです。5020系の機械は後に国産の名機と評されましたが、村田さんは次の開発に向かわれました。

次に村田さんが取り組んだのは、通産省の大型プロジェクト制度による超高性能電子計算機の開発でした。これは1970年代の海外勢のシステムに劣らぬシステムの開発を目指したMSIと高速ICによるシステムで、仮想記憶と、キャッシュメモリを備え、さらにマルチプロセッサ構成が可能な第一線のシステムでした。このシステムは後にHITAC 8800、8700として製品化され、東大大型計算機センターを始め、気象庁、国鉄みどりの窓口、銀行オンラインにも使用されました。

その後、外資勢の攻勢に対抗するための通産の施策による国産メーカーの系列化で日立は富士通社とMシリーズ（IBM社のマシンの互換機）を開発することになりました。村田さんはもはや自分のやるべきことはない、コンピュータ開発の第一線から離れることになりました。

そして、村田さんは元々興味のあった数学領域の有限要素法など数値解析分野の仕事を取り上げ、大型数値シミュレーションの研究に情熱を傾けられました。図書館情報大学、さらに神奈川大学で若い学生さんから大いに慕われたとのこと。村田さんは筆者のような会社関係者とはと異なり、それ以外の沢山の若者にとっても、魅力あふれたお人柄で、本質的に良き指導者、得難い教育者であられたものと思います。どうか安らかにお休みください。心から御冥福を祈ります。（平成21年8月18日）



御 略 歴

1923年10月4日	鳥取県米子市生まれ
1942年 9月	第六高等学校甲類卒業
1942年10月	東京帝国大学第二工学部航空原動機学科入学
1945年10月	東京帝国大学第二工学部航空原動機学科卒業（工学士）
1948年 4月	東京大学理学部数学科入学
1948年10月～1956年 9月	東京都立小石川高等学校教諭（定時制勤務）
1951年	東京大学理学部数学科卒業（理学士）
1951年 4月	東京大学大学院理学部数学科関数解析専攻前期（旧制）入学
1953年	東京大学大学院理学部数学科関数解析専攻前期（旧制）修了
1954年 4月～1956年 3月	東京大学工学部非常勤講師（数学力学第Ⅲ担当）
1956年10月	東京大学工学部専任講師
1960年 2月～1960年 3月	東京大学工学部助教授
1960年 4月～1961年 3月	東京大学工学部非常勤講師
1960年 4月	株式会社日立製作所勤務（戸塚工場）
1961年 8月	株式会社日立製作所中央研究所主任研究員
1962年 2月	東京大学理学博士（ブラウン管記憶装置）
1966年 2月	株式会社日立製作所中央研究所第7部長
1967年 8月	株式会社日立製作所神奈川工場設計部長
1971年 2月～1977年 2月	株式会社日立製作所神奈川工場副工場長兼超大型部長
1971年 2月	株式会社日立製作所神奈川工場技師長兼電子事業本部技師長
1973年11月～1983年 3月	電気通信大学電気通信学部非常勤講師（計算機設計特論）
1977年 2月～1983年 3月	株式会社日立製作所中央研究所技師長兼ソフトウェア工場技師長
1978年 4月～1983年10月	東京大学理学部非常勤講師（情報科学特論Ⅴ数値解析担当）
1981年 4月～1982年 3月	東京大学工学部非常勤講師（物理工学特別講義第2）
1983年 4月	図書館情報大学教授
1989年 3月	図書館情報大学定年退官
1989年 4月	神奈川大学理学部情報科学科教授
1994年 3月	神奈川大学理学部情報科学科定年退任
1994年 4月	神奈川大学理学部情報科学科特任教授
1999年 3月	神奈川大学理学部情報科学科特任教授定年退任
2009年 7月27日	逝去（85歳）
1960年10月	情報処理学会入会
1976年 5月	情報処理学会論文賞（対称帯行列を三重対角化するための新アルゴリズム）
1988年 9月	情報処理学会研究賞（仮想メモリ上での大規模線形計算）
1997年 5月	情報処理学会名誉会員

受賞・栄誉

1965年12月	毎日工業技術賞（電子計算機の国産化 HITAC 5020）
1973年10月	紫綬褒章（超高性能電子計算機の開発）
1973年11月	工業技術院長賞（超高性能電子計算機に関する技術の開発）
1974年 4月	産業技術大賞（高性能電子計算機システムの開発と波及効果）